

2021. 7. 8 (木)

## 豊かな「孤独」を目指して

松宮園子

朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。シモンとその仲間がイエスの後を追い、見つけると、「みんなが捜しています」と言った。イエスは言われた。「近くのほかの町や村へ行こう。ここでも、わたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである。」そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。

(マルコによる福音書 1章 35-39節)

### はじめに

皆さん、おはようございます。昨年度の4月にこちらでの仕事を始めたので、今年で2年目になりますが対面授業の機会が少ないため、今日チャペルアワーでこのように皆さんにお話しできる機会をいただいたことを大変嬉しく、有難く思っています。

私の専門としている研究分野は20世紀から現代にかけてのイギリス小説及び文化です。最近行った、2回生の方が対象のゼミ所属に関する面接の中で「どうしてイギリス小説を専門にしようと思ったのですか」という質問をいただいて、何だか久しぶりにそのようなお尋ねをいただいたので、嬉しくなって自分でも改めて考えてみました。その時にお答えした内容は「小さい頃からずっと本を読んでいて、それが日本のものよりもむしろ英語圏のものの方が多く、意識しないうちから自分の中に刷り込まれてしまった」というよ

うなものでした。

皆さんは子どもの頃にどのような本を読まれたでしょうか。私の頃は、特に小学校の高学年くらいに読むようないわゆる「少女小説」のようなものは、『赤毛のアン』や『小公女』などででしたし、推理小説はホームズにポワロ、という形でなぜか英語圏だったので、そして小さい頃に読んだそうした作品を、今授業でもちゃっかり使ったりできるので、本当に有難いことだなと思っています。

### 二つの「孤独」

前置きが長くなりましたが、今日はコミュニケーションというテーマを頂いておりますので、その反対に思われるかもしれませんが、「孤独」について少しお話ししたいと思います。現在、この「孤独」をテーマに行っている研究があることから、色々な本や資料を調べているところなのですが、多くの研究で

言われているのは孤独には2種類ある、ということ。英語でいうと“Loneliness”と“Solitude”になるのですが、非常に単純に言うと前者は望ましくない孤独、後者は望ましい孤独、ということになります。

皆さんにも何となくこの違いは実感できるのではないのでしょうか。楽しめない孤独と、楽しめる孤独、と言えるかもしれません。例えば社会から疎外されたり、何らか強制された形で隔離されたり、あるいは差別を受けたり、という「見捨てられた」感のある孤独は、勿論私たちの心にマイナスとなり、何とか解消すべきものです。その一方で、たとえば20世紀半ばに活躍したハンナ・アーレントというかなり偉い政治哲学者がいるのですが、彼女は“Solitude”について、「全ての思考は“Solitude”の中で生まれる」と述べており、私たちの精神がむしろ豊かになる状態、と考えています。面白いのは、この“Solitude”において、アーレントがその人自身の中で「対話」が行われている、と言っている点です。だからある意味で「一人」ではないのです。そしてもちろん、何の知識もない私がこの場所で言うのも厚かましいことですが、一人であっても目に見えない大きな存在と繋がる、ということはお祈りという形で太古の昔から受け継がれてきたことでしよう。

## 開かれた「孤独」

やや強引に話を戻しますと、小さい頃から本を読んでいる時は孤独ではなかった、それはお話の中のキャラクターが自分の心の中にいて、「対話」という立派なものではなくと

も、そのキャラクターの喜びや悲しみを感じながら、私はその人たちと一緒にいたのだな、と改めて思います。そしてコロナのこの時代にあって、ひょっとして「世界の中で取り残されている、切り離されてしまった」と思っている人が、本を読むことで「誰かと共にある」気持ちを持てるようになれば良いな、と強く思います。小さな形ではあっても文学を職業としている以上、私も何かそのために貢献ができればと今考えているところです。

もちろん本を読まなくとも、“Solitude”の境地に達する道は他にも色々あると思います。皆さんは充実した「一人の時間」に何をしていますか？ 趣味をしたり、身体を動かしたり、料理をしたり、と答えは様々でしょう。今のことですからスマホやPCを相手に、一人でも思い切り楽しめることが沢山あるでしょう。特にこうしたテクノロジーを「孤独の友」とすることには、従来のには批判が強かったようにも思います。例えば、一人公園を散歩しているのは健康的な孤独、部屋の中でずっとスマホを見つめているのは不健康、というようなイメージがまだ強いかもしれません。

しかしテクノロジーがここまで進化を遂げ、新たなコミュニケーションの形として本当にその可能性が広がっている現代においては、もっと柔軟に考えることで望ましい「孤独」の在り方が増えるように思います。どのような孤独が望ましく、どのような孤独が望ましくないのかを考える上で、恐らく大切なのは、自分の心が閉ざされることなく、新しい何かに向かって開かれているか、という点ではないでしょうか。たとえ大勢の人と一緒にいても、心を閉ざし他の人の考えに耳を傾

けられなければ、激しい孤独を感じることでしょう。反対に、たとえ一人で部屋の中においても、ネット上に見る新しい世界や、本の中のキャラクターの言葉や、あるいは何かのきっかけで現れた今まで知らなかった自分自身の一面と向き合うことで、その時間は豊かなコミュニケーションの場となるはずです。そしてその経験は、実際に他の人と触れ合う時間を更に有意義なものとしてくれるでしょう。

最後に、須賀敦子さんの美しい言葉をご紹介します。彼女はイタリアで長く生活されたのですが、そこでの大切な仲間や家族が失われていく中、その喪失によって「私たちはすこしずつ、孤独が、かつて私たちを恐れさせたような荒野でないことを知ったように思う」と述べられています。孤独は荒野ではない、と信じることで、皆さんの生活がより豊かなものになりますように。

(社会学部教授)